「下衆の詞には、かならず文字あまりたり」考

安東大隆

はじめに

『枕草子』に、次の一文がある。

おなじことなれどもきき耳ことなるもの　法師の言葉。をのこのことば。女の詞。下衆の詞には、かならず文字あまりたり。（六段）[1]

この文は、階級によって使用する言葉に、違いのあることを、述べているのである。同じ言葉ではあるが、聞いた場合の感じの違うものとして、法師の言葉・男の言葉・女の言葉・下衆の言葉を挙げている。法師・男・女の言葉については、どこがどうだということは、言っていないが、下衆の場合は「かならず文字あまりたり」と、その「きき耳ことなる」理由を述べている。

さて、ここでは、下衆の詞はなぜ文字あまりするのか。その理由について、考えてみたい。

一

その問題について、考察する前に先ず、下衆の言葉が文字余りしているとは、どういうことかを、先人の説によりながら、概観しておこう。

江戸時代の北村季吟（春曙抄）は、

是も上臈の詞とことなる事なるべし。徒然草に古は車もたげよ火かかげよとこそいひしを。もてあげよかきあげよといふ口をしと侍るもいやしきさま似たるにや

と、述べ、『徒然草』の二十二段の例を引いて、説明している。

また、嘉藤盤斎（盤斎抄）は、

玉鬘巻云、此おはしますらん女君、すぢことにうけ給はれば、いと忝なし。ただ何がしらが、私の君と思ひまうしていただきになむささげ奉るべき云々。すやつばらを、ひと

しなみにはし侍りなむ。わが君を、きさきの位におとし奉らじ物をや云々。是等大夫監が詞也。いやしき心、思ひ合べし。

と、解説している。

その他、明治以後においても、種々解説があるが、『枕草子解環』(萩谷朴氏)に要領よくまとめられているので、繰り返すことは避けたい。そして、『枕草子解環』では、「下衆の言葉が文字余り」している原因を、次のように理解しておられる。即ち、「当時の平安市民の中で、下衆と呼ばれる下層階級を、形成していた人々は、地方人である。そして其れ等の人々は方言を使用していた。よって、

本段でいう「下種の言葉の文字余り」とは、主として方言に根差す、冗言・剰語と考えることが了解されよう。」

と、結論しておられる。

つまり、「冗言・剰語」が、文字余りの内容である、というのは、どの説も異論の無いところである。萩谷氏は又、その原因についても、達見を示しておられる。

二

下衆の言葉が、文字余りして冗長である、ということは、逆の言い方をすれば、下衆以外の人(上衆)の言葉は、文字余りしない、ということである。そこで、先ず文字余りしていない上衆の言葉とは、具体的にどのようなものかを、確認しておきたい。

言葉を発するという場合、概ね、会話の形をとることが多い。その例を引いて、上衆の言葉をみてみよう。

頭の中将藤原斉信との、関わりを描いた段(八二段)には、次の様にある。頭の中将が、清少納言についての「すずろなるそら言」を聞いて、「何しに人とほめけん」と、ひどく非難していた。

長押の下に火ちかくとりよせて、さしつどひて扁をぞつく。「あなうれし。とくおはせ」など、見つけていへど、すさまじき心地して、なにしにのぼりつらんと覚ゆ。炭櫃のもとにゐたれば、そこにまたあまたゐて、物などいふに、「なにがしさぶらふ」と、いとはなやかにいふ。「あやし、いづれのまに、何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なりけり。「ただここもとに、人伝ならで申すべき事」などいへば、さし出でて問ふに、「これ、頭の殿の奉らせ給ふ。御返りごととく」と言ふ。

いみじくにくみ給ふに、いかなる文ならんと思へど、ただ今いそぎ見るべきにもあらねば、「往ね。いまきこへん」とて、ふところにひき入れて入りぬ。なほ人の物いふ聞きなどする、すなはちたち帰り来て、「さらば、そのありつる御文賜りて来」となん仰せらるる。とくとく」といふが、あやしう、いせの物語なりやとて見れば、青き薄様に、いときよげに書き給へり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。

この文章の中で、括弧「　」に入っている箇所は、概ね会話

の文である。これらの文章を見ると、次の点に気付く。

イ、倒置形になっている文が多い。

ロ、終止形で終わっている文が少ない。（命令形・体言等で終止している。）

つまり、文章を最後まで、完全に言い尽くしてしまうというのではなく、途中で言い残して置くのである。あるいは又、必要な用件のみを、簡便に表現するのである。これらが、上衆の言葉の内容である。『枕草子』の他の例を見ても、大体このようなことが、裏付けられる。上衆の言葉の、今述べたような特徴に対して、下衆の言葉は、言い残すこと無しに、全部を言い尽くしてしまうもので、あったろう。それが、結果的に冗言という印象を、与えたものであろう。

さて、そこで本題にかえって、なぜ下衆の言葉は、文字あまりするのかということを、考えてみたい。勿論、これは、結果的には、上衆の言葉が、どうして文字あまりしないのか、という問題と、相関関係にあるものと思われる。

『源氏物語』などを見ると、貴族の会話は、よく和歌を媒介として、なされている。例えば、「夕顔ノ巻」の始めにある、源氏と随身の会話は、次のようである。きりかけだつ物に、蔓いかかっている白い花を見た源氏は、

「遠方の人に物申す」と、ひとりごち給ふを、御随身つい居て、「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍べる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ、咲き侍りける」と申す。

白く咲いている、夕顔の花を見た、源氏と随身との、和歌を介しての応答である。

一例ではあるが、和歌を媒介としての会話は、当時の貴族の常識であった。そして又、和歌を上手に、詠みこなすようになることは、成人としての、必須の教養でもあった。同じ『源氏物語』の例であるが、「十ばかりにやあらむ」（「若紫ノ巻」）で、源氏に見いだされた紫上は、二条の院に迎えられて成人していくのである。「葵ノ巻」（紫上十四才）では、賀茂の祭りの折に、源氏と和歌の贈答をしている。その紫上の歌の「らうらうじきものから、若うをかしきを」、源氏は「めでたし」と、おぼすのである。紫上が、源氏の妻となるのは、それからまもなくのことである。和歌を源氏と贈答することが、紫上の成長を側面から、証明していることになろう。

また、公任の三舟の才も、和歌の教養としての必要を、説明したものである。

さて、以上のことから、上衆の言葉には、和歌の素養が、色濃く映じる旨、納得される。

三

そのような観点で、『枕草子』にもう一度、目を通してみると、次の一段が、注目に値する。

それは、正暦五年（九九四）の二月二十日に道隆が、法興院内の積善寺で、女院（東三条院詮子）や中宮定子を迎えて一切経を供養した時の記事である。二月一日に中宮は里邸で

ある二条の宮へ御渡りになる。その御階のもとに、一丈ばかりの桜の造花が、とりつけてある。その造花は、「すべて、花のにほひなどつゆまことにおとらず。いかにうるさかりけん。」と、思われる程であった。しかし、所詮、造花であるから、清女の、「泣きて別れけん顔に心おとりこそすれ」という独り言を、中宮が御聞きになって、「げに雨降るけはひしつるぞかし」とおっしゃる。そうしているうちに、殿の方から侍や下衆が、やって来てひそかに引倒して、取り片付ける。それを見た清女は、

「『いはばいはなん』と、兼澄がことを思ひたるにや」とも、よき人ならばいはまほしけれど、「彼の花盗むは誰ぞ。あしかめり」といへば、

と言う。すると、侍や下衆は、「いとど逃げて、引きもて」行く。

清女は、造花を片付けに来た人が、「よき人」であれば、「いはばいはなん」(山守はいはばいはなん高砂の尾の上の桜折りてかざさむ)という古歌を引用して、話しかけるところだが、相手が侍や下衆であるので、思い留まる。ここで「よき人」というのは、ようするに、侍や下衆などは「侍や下衆」に対する言葉であり、所謂「上衆」である。ようするに、侍や下衆などに対しては、歌を引用して、話かけたりしても、仕方がない、ふさわしくない。あるいは、そうしても、無駄であろうという意識が、はたらいているものと思う。和歌を利用しての会話は、貴族の主に得意とするところであり、侍や下衆は、それ程得意では、なかったのであろう。逆の見方をすると、彼らは、和歌を利用して、会話をするというような環境に、置かれていなかったものであろう。

そこで、前述した、下衆の言葉が、文字あまりするということを、態起してみよう。文字余りの意味するところは、「冗言・剰語」である。これらのことは、彼らが、和歌に堪能で無いということに、由来するものであろう。一方上衆は、和歌に堪能であり、それが、日常的になっているので、日常の会話も、語数に限りのある和歌に倣って、省略し、短く表現したものであろう。

おわりに

以上、「下衆の詞には、かならず文字あまりたり」という、『枕草子』の一文をあげて、なぜ、文字余りするのかという、その理由を考察して来た。

文字余りの内容は、「冗言・剰語」である。その「冗言・剰語」を、もたらす理由は、和歌にいかに習熟しており、またそれを、日常生活に利用しているかによる。下衆は上衆に比して、和歌についての、習熟度や利用度が低い。つまり、和歌に慣れていないのである。その為に、日常の会話においても、「冗言・剰語」が自然と多くなり、文字あまりするという印象を、清女に与えたものと、思われる。

〈註〉

①本文の引用は古典文学大系(岩波書店)によった。

②『源氏物語』の引用は、朝日新聞社刊の「古典全書」のものに依った。